

## われわれは生き残れるか？ 大野道夫

一月に全国大会下見で詩歌文学館へ行った時、近藤芳美、塚本邦雄の蔵書の一部を見ることができた。近藤の社会主義関係の本がかなりある蔵書、塚本の数限りなき付箋が貼られた蔵書を見上げ、手に取り、リアリズム対反リアリズムという相反した立場の二人が膨大なエネルギーで戦後短歌を推進していったことをあらためて思った。

ひるがえって現代短歌の状況を見ると、たとえば「短歌」一月号では「われわれは生き残れるか？」という新春座談会がおこなわれた。そのなかで特に結論部分の、「僕は『われわれは生き残れるか』という問い自体が怖いのです。」（吉川宏志）、『「生き残れる」と安直に答えてはいけませんよ。」（坂井修一）などの発言が心に残った。新春座談会にしては明るくない終わり方だが、彼らの率直な発言に私も共感したい。

そして新人賞の動向をみると、歌壇賞は佐藤モニカ「マジックアワー」が受賞した。

- ・はちみつに浸けた甘さの恥づかしさ接客をするわたしの声は
- ・馬上にて風感じ来しいもうとにわれの持たざる頬の色あり
- ・先割れスプーンで西瓜の種を落とすときましろき皿に五線紙の

見ゆ

靴を売っている現場からの、現代では珍しい職業詠。一首目はその声の〈恥づかしさ〉を、「はちみつの甘さ」ではなく〈はちみつに浸けた甘さ〉といっているところがうまい。現在では加藤治郎、穂村弘などが典型的だが、作者あるいは作中人物がどのような職業かわからない歌が多い。これは授業場面がほとんど描かれない学園ドラマと同じで、人々の関心が本業より、それ以外の場面や人間関係に向っているため、と考えられる。

ただ佐藤の職業詠は、選考委員の小島ゆかりも「謎がない」と評しているように、説明的な歌も散見する。そのなかで二首目は、乗馬してきた妹を詠んだのだろうが、連作の中で〈ひざまづき接客するといふことに慣れたり〉と詠む作者の日常との対比で読むと、より良く読める歌なのではないかと思う。また三首目は、〈五線紙〉が本当に描かれていたか、描かれていなかったか、どちらともとれる（ので良い）と思った。

また佐藤と賞を争った、次席の平岡直子「月とカレンダー」もたいへん良い作品であった。

・弟のしやがみこむ道 野良猫に毎日々ちがう名前をつける

・負けたほうが死ぬじゃんけんでもあるまいし、開いた手の平の上の蝶

一首目の弟、佐藤作の妹と比べると距離をもって兄弟を見ていく。ただし平岡作は魅力的だが、理解が難しい所も散見する。二首目、パーを出して、負けたら手の平を握って蝶を握り殺すかもしれないという予感が、〈負けたほうが死ぬじゃんけん〉をあらわしているのだろうか？もうほんの少し読者を意識すると、さらによい連作になるのではないか、と思った。